

第33回

四国小児アレルギー研究会

プログラム・抄録集

会長： 竹廣 敏史（竹広小児科医院）
会期： 2022年7月16日（土）～2022年7月17日（日）
会場： 7月16日（土） ホテルマリンプレスさぬき2階 瀬戸 A
7月17日（日） 香川県立中央病院1階 講堂
共催： サノフィ株式会社、アツヴィ合同会社

研究会にご参加される先生方へ

- 7月16日(土)18:00、7月17日(日)9:00より受付を開始いたします

- 参加費:
当日、受付にて医師 5,000 円、医師以外の医療関係者 3,000 円をお支払いの上、ご入場ください。
事前に Web 参加登録をされて、お支払いがお済みの方は受付スタッフにお伝えください。
初期研修医および学生の方は無料でご参加頂けます。

- 学会単位:
日本医師会生涯教育制度単位 : 特別講演・招待講演共に 1 単位
日本アレルギー学会専門医制度 : 出席者 2 単位、演者・座長・講師 2 単位

- 一般演題発表:
以下の要領に従ってご準備をお願いします。
 - 1) 発表 7 分／討論 4 分 を予定しています。
 - 2) 発表は PC プロジェクターによるプレゼンテーションのみとなります。
スライドは使用できませんのでご注意ください
 - 3) 会場の PC は Windows 11(Power Point 2013)をご用意しています。
Macintosh の場合は PC 本体をお持ち込みいただくか、Windows 11 でも問題ないことをご確認いただき USB フラッシュメモリーでデータをお持ちください。PC 本体を持ち込まれる場合は併せて接続端子もご準備いただくようお願いします
 - 4) PC 本体、もしくは USB フラッシュメモリー持ち込みによる発表が可能です。
なお、使用するアプリケーションは Power Point のみとさせていただきます。
 - 5) 発表データのファイル名は「(演題番号)(氏名)」としてください。
 - 6) 発表データは発表の 30 分前までに PC 受付にお持ちください。
 - 7) 会場では演者の先生ご自身で演台上の PC を操作していただきます。

世話人会のご案内

後日 ZOOM で開催予定です

交通案内



7月16日(土)

ホテルマリンパレスさぬき

香川県高松市福岡町二丁目3番4号

TEL:087-851-6677

【アクセス】

- ・高松自動車道 高松西 IC より車で約 25 分
高松中央 IC より車で約 15 分
- ・JR 高松駅より車で約 6 分

7月17日(日)

香川県立中央病院

香川県高松市朝日町一丁目2番1号

TEL:087-811-3333

【アクセス】

同 左

プログラム

2022年7月16日(土) 会場:ホテルマリパレスさぬき 2階 瀬戸 A/ハイブリッド開催

18:45~19:00 製品紹介「デュピクセント皮下注」

開会の辞 第33回会長 竹廣 敏史

19:00~20:00

【招待講演】

小児アレルギー疾患のパラダイムシフト ~生物学的製剤をどう使うか~

座長 日下 隆 先生(香川大学医学部小児科学講座 教授)

演者 岡藤 郁夫 先生(神戸市立医療センター中央市民病院 小児科医長)

共催 サノフィ株式会社

2022年7月17日(日) 会場:香川県立中央病院1階 講堂/特別講演のみハイブリッド開催

9:40~9:45 開会の辞 第33回会長 竹廣 敏史

9:45~10:29 一般演題 食物アレルギー

座長 高島小児科 岡本 尚子

1. 食物アレルギーの子を持つ保護者に対するアレルギー予防に関するアンケート調査

西条中央病院小児科 西村 幸士

2. 卵黄による acute food-protein induced enterocolitis syndrome (FPIES)と考えられた 7 症例

香川大学医学部小児科学講座 荻田 博也

3. 卵黄による食物蛋白誘発胃腸炎 (food-protein induced enterocolitis syndrome : FPIES)と考えられた乳児 18 例の検討

けら小児科アレルギー科 森澤 豊

4. 母親の除去・負荷試験が有用であった母乳栄養児の food protein-induced enterocolitis syndrome

高知大学小児思春期医学講座 竹内 愛那

10:29~11:02 一般演題 アレルギー疾患における臨床検査

座長 香川大学医学部小児科学講座 荻田 博也

5. 乳児のアトピー性皮膚炎における血清 TARC 測定の有用性

小泉小児科 愛媛県立中央病院小児科 小泉宗光

6. 食物アレルギー児におけるビタミン D に関する検討

徳島大学小児科 杉本 真弓

7. 好塩基球ヒスタミン遊離試験(HRT)および好塩基球活性化試験(BAT)の測定は卵・牛乳アレルギーの臨床経過(発症、悪化、改善、治癒)と重症度の推定に有用か

くす小児科 久寿 正人

11:12～11:45 気管支喘息・アトピー性皮膚炎

座長 香川大学医学部小児科学講座 西庄 佐恵

8. マクロライド少量長期療法を行いコントロールに至った、10q23 欠失を伴う乳児喘息の 1 例

高知県立幡多けんみん病院 萩野 紘平

9. Dupilumab および Upadacitinib 治療を導入したアトピー性皮膚炎患者に対する多職種連携の取り組み

愛媛生協病院薬剤科・小児アレルギーエドゥケーター 立川 登美子

10. 中等症～重症のアトピー性皮膚炎に対する生物学的製剤及び JAK 阻害剤による治療経験

愛媛生協病院小児科・アレルギー科 有田 孝司

12:00～13:00

【特別講演】

小児アトピー性皮膚炎治療の現状と治療戦略

座長 竹廣 敏史(竹広小児科医院)

演者 山本 貴和子(国立成育医療研究センターアレルギーセンター 総合アレルギー科医長)

共催 アツヴィ合同会社

13:00～13:05 次期会長挨拶(第34回会長 小泉宗光)・閉会の辞

抄 録

招待講演

小児アレルギー疾患のパラダイムシフト ～生物学的製剤をどう使うか～

神戸市立医療センター中央市民病院

小児科医長 岡藤 郁夫

小児アレルギー領域では、ここ 10 年でパラダイムシフトをもたらす大きな変化が3つあった。1つ目は、アレルギーマーチ予防戦略の方向性が定まったこと。アトピー性皮膚炎を厳格に管理した上で生後早期より偏りのない多様なアレルゲンとなり得るものと触れ合うことがアレルギー疾患の予防戦略として妥当であろうことが国内外の研究で裏付けられつつある状況である。2つ目は、舌下免疫療法の保険収載。アレルギー治療の中で唯一の治癒を狙えるポテンシャルを持ったアレルゲン免疫療法が患者と医療者の双方に負担少なく実施できるようになったことは我が国のアレルギー診療を大きく変化させている。3つ目は、アレルギー分野での分子標的療法の適用。ステロイドに頼らざるを得なかった今までの診療においてステロイドとは別次元の切れ味と存在感を醸し出している。今回は分子標的療法の中でも生物学的製剤について取り上げる。

現在、小児のアレルギー領域で使用可能な生物学的製剤は3つある。オマリズマブ、メポリズマブ、デュピルマブである。オマリズマブは気管支喘息(6歳以上)、季節性アレルギー性鼻炎(12歳以上)、特発性慢性蕁麻疹(12歳以上)、メポリズマブは気管支喘息(6歳以上)、デュピルマブは気管支喘息(12歳以上)に適応がある。いずれも2型炎症の制御がコンセプトの薬剤である。特に気管支喘息では複数の選択肢があり、6歳以上12歳未満ではオマリズマブとメポリズマブが、12歳以上の小児ではオマリズマブ、メポリズマブ、デュピルマブの3剤が使用可能である。どの製剤を選択するかは定まったものはないが、並存疾患、IgE値、接種間隔、接種液量などを考慮して決定する。この3剤の中ではデュピルマブが一番新しい薬剤である。約3年間の観察研究(TRAVERSE試験)のデータが公開され、デュピルマブの有効性と安全性が確認されている。本講演では、これらのデータも参考にしながら、『小児気管支喘息治療・管理ガイドライン 2022』をベースに、どのような患者さんに生物学的製剤を導入していくのが好ましいか考える機会になれば幸いである。

特別講演

小児アトピー性皮膚炎治療の現状と治療戦

国立成育医療研究センター アレルギーセンター

総合アレルギー科医長 山本 貴和子

乳児期から小児に持続するアトピー性皮膚炎の有症率は、約 1 割程度とされている。乳児期においては乳児湿疹として経過観察されるケースも多いが、アトピー性皮膚炎の早期発症は食物アレルギーなど各疾患のリスクに繋がることが示唆されている。これらのことからアトピー性皮膚炎治療は早期かつ適切な治療介入が必要である。

ステロイド外用薬などの抗炎症外用薬や保湿剤が基本の治療となる。中等症以上の場合は、寛解した後湿疹がなくても抗炎症外用薬の間欠塗布によるプロアクティブ療法が必要となる。一方で、一部の患者では外用療法のみでの寛解導入が難しく、再燃増悪を繰り返すとともに、アドヒアランスの低下により皮疹の重症化を引き起こすケースも散見されてきた。コントロールが不良となると、学生生活を送る児にとって、精神的影響は大きく、睡眠障害や不登校など日常生活への影響は大きい。特に青年期はアドヒアランスが不良となりやすい年代である。

昨今、新たに小児適応を取得した経口 JAK 阻害薬であるリンヴォックはアトピー性皮膚炎の炎症を抑える薬剤であり、アドヒアランスが低下する青年期の患者で、これまで完全寛解を得られる機会のなかった患者にとっても湿疹ゼロを達成できる可能性も見えてきた。

今回は乳児期から小児期にかけてアトピー性皮膚炎治療の現在と注意すべきポイント、リンヴォックを使用すべき患者像、注意すべき安全性のポイントなどを踏まえ、アトピー性皮膚炎の最新知見について考えていきたい。

一般演題

1. 食物アレルギーの子を持つ保護者に対するアレルギー予防に関するアンケート調査

○西村 幸士、吉松 卓治、杉海 秀、田中 真理
西条中央病院 小児科

食物アレルギーの子を持つ保護者に対して、アレルギー予防に対してどのような対策をとっていたのかを調査するため、食物アレルギーの既往を持つ患児の保護者 132 人に無記名でアンケートを依頼した。食事制限をした方がいいと答えた人は妊娠中が 1%、授乳中が 18%だった。乳児期にスキンケアをした方がいいと答えた人は 92%、鶏卵アレルギーの予防として鶏卵を食べさせる時期を遅らせた方がいいと答えた人は 27%であった。

2. 卵黄による acute food-protein induced enterocolitis syndrome (FPIES)と考えられた 7 症例

○荻田 博也、西庄 佐恵、川西 隆史、宮本 喜和子、平場 敬之、井上 依里、横田 崇之、
福家 典子、若林 誉幸、近藤 健夫、近藤 園子、小西 行彦、岩瀬 孝志、日下 隆
香川大学医学部小児科学講座

今回我々は卵黄を原因とする acute food-protein induced enterocolitis syndrome (FPIES)と考えられた 7 症例を経験した。本疾患はアレルゲン摂取後 1-4 時間後の反復嘔吐を特徴とする非 IgE 依存性の食物アレルギーである。卵黄摂取後平均 2.7 時間で平均 5.5 回の反復嘔吐が出現し、2 症例で軟便を認めた。うち 2 症例で卵黄と卵白特異的 IgE 陽性であったが、7 症例とも感作の有無に関わらず卵白摂取による症状誘発既往はなかった。被疑食物摂取数時間後の嘔吐は FPIES を考慮する必要がある。

3. 卵黄による食物蛋白誘発胃腸炎 (food-protein induced enterocolitis syndrome : FPIES) と考えられた乳児 18 例の検討

○森澤 豊

けら小児科

3年間に卵黄による FPIES 18 例 (2019 年 5, 2020 年 7, 2021 年 6) (男 11, 女 7) を経験した。初発時月齢 6~11 ヶ月 (平均 7.7 ヶ月), 卵黄摂取 1~3 時間後に激しい嘔吐を発症し, 同様のエピソードを複数回認めた。全例, 皮膚・呼吸器症状なく, 卵黄特異的 IgE 値クラス 0, 皮膚プリックテスト (SPT) 15~30 分後は陰性であった。6 例で SPT 実施 4~24 時間後に紅斑が出現した。

4. 母親の除去・負荷試験が有用であった母乳栄養児の food protein-induced enterocolitis syndrome

○竹内 愛那、大石 拓、藤枝 幹也

高知大学小児思春期医学講座

症例は 6 か月男児。生後 3 か月頃からの嘔吐、体重増加不良のため、当院入院となった。血液・便検査、画像検査は異常なく、入院後嘔吐は消失した。入院後の母の牛乳除去が判明し、再度母に牛乳を負荷し授乳したところ、3 時間後に大量嘔吐、顔色不良を認めたため、母乳経由の牛乳による food protein-induced enterocolitis syndrome (FPIES) と診断した。母乳による消化管アレルギーの症例において、母親に対して考えられる食材の除去・負荷試験も有用であると考えられた。

5. 乳児のアトピー性皮膚炎における血清 TARC 測定の有用性

○小泉 宗光^{1),2)}、楠目 和代³⁾

小泉小児科¹⁾

愛媛県立中央病院 小児科²⁾

愛媛県立新居浜病院 小児科³⁾

血清 Thymus and activation-regulated chemokine (TARC) はアトピー性皮膚炎 (AD) の重症度評価に有用であるが、乳児早期での検討は見られない。生後 3-5 ヶ月の AD 患児 35 名について検討したところ、初診時重症度 (SCORAD スコア) と血清 TARC、好酸球数に正相関が認められ、重症群の TARC カットオフ値は 6192pg/mL (感度 80%、特異度 83%) であった。

6. 食物アレルギー児におけるビタミン D に関する検討

○杉本 真弓、佐々木 亜由美、漆原 真樹

徳島大学病院小児科

当院の食物アレルギー児 76 名における血清ビタミン D 濃度と食物アレルギーの臨床経過との関連について検討した。血清 25(OH)D の中央値は 17.0ng/ml、45 名(59%)がビタミン D 欠乏、27 名(36%)がビタミン D 不足に該当した。除去食物の種類や数、合併するアレルギー疾患と血清 25(OH)D との関連は認めなかった。鶏卵アレルギー児では血清 25(OH)D と 1 年後の臨床経過との関連が示唆された。

7. 好塩基球ヒスタミン遊離試験(HRT)および好塩基球活性化試験(BAT)の測定は卵・牛乳アレルギーの臨床経過(発症、悪化、改善、治癒)と重症度の推定に有用か

○久寿 正人

くす小児科

当院では、愛媛版除去食連絡票の「除去食品指導票」(愛媛県医師会・愛媛県小児科医会 2016 年作成)を食物アレルギー児の除去食療法の指導に用いている。食物負荷試験の実施や除去食解除の判断に苦慮する時、食物アレルギー診療ガイドラン 2016 に記載の HRT(生卵白・生牛乳を抗原とし現在片山化学測定)と BAT(生卵白・卵ポーロ・ニューMA-1・MA-mi・E 赤ちゃん・育児用ミルク・生牛乳を抗原とし BML 測定)を測定し判断の参考にしており、その実際を報告する。

8. マクロライド少量長期療法を行いコントロールに至った、10q23 欠失を伴う乳児喘息の 1 例

○萩野 紘平、林 一鷹、野村 真也、松下 憲司、前田 明彦

高知県立幡多けんみん病院

生後 4 か月に呼気性喘鳴を認め、ウイルス分離でライノウイルスが同定された。兄弟も喘息として吸入ステロイドを使用しており、吸入ステロイド、プラシルカストを導入したが、高頻度に喘鳴を反復した。IgE の上昇はなく経過から吸入ステロイド抵抗性の病態を考え、体重増加不良もあり、マクロライド少量長期療法を行いコントロールに至った。その後、体重増加良好となったが、大腸ポリポーシスが判明し、10q23 欠失が見つかった。

9. Dupilumab および Upadacitinib 治療を導入したアトピー性皮膚炎患者に対する多職種連携の取り組み

○立川 登美子¹⁾ 有田 孝司²⁾

愛媛生協病院薬剤科・小児アレルギーエディケーター¹⁾

愛媛生協病院小児科・アレルギー科²⁾

当院では中等症～重症アトピー性皮膚炎患者に、2019年5月よりDupilumab治療を28名に導入し、2021年11月よりUpadacitinib治療を9名に導入した。開始前に、医療費助成制度や治療スケジュールなどの説明、Dupilumabでは自己注射手技指導、Upadacitinibでは事前検査を行い、治療中は、受診毎に皮膚症状やコンプライアンスの確認、副作用モニタリングなどを継続して実施することが必要となる。既存治療やスキンケアと並行して、円滑かつ適切に、これらの治療を導入・継続するために当院で実施している多職種連携の取り組みを報告する。

10. 中等症～重症のアトピー性皮膚炎に対する生物学的製剤及び JAK 阻害剤による治療経験

○有田 孝司

愛媛生協病院小児科・アレルギー科

2018年、15歳以上の既存治療で効果不十分なアトピー性皮膚炎に対して生物学的製剤であるデュピクセント注が、更に2020～2021年にかけて複数のJAK阻害剤が登場した。今まで、治療に難渋していた中等症～重症のアトピー性皮膚炎患者に対して、「Life-changing drug」として期待されている。今回、初期に導入したデュピクセントによる治療症例10例とJAK阻害剤のウパダシチニブによる治療症例6例、切れ変えにより奏効した3例の治療経験をまとめたので報告する。

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
開催日	平成元年7月8-9日	平成2年4月14-15日	平成3年5月11-12日	平成4年5月9-10日	平成5年5月15-16日
開催県	香川	愛媛	高知	徳島	香川
会場	ホテルサンルート瀬戸大橋	愛媛県民文化会館	サンピア高知	郷土文化会館	ロイヤルパークホテル高松
会長	国立療養所香川小児病院 西川 清	愛媛県立今治病院 渡辺 雅愛	国立療養所高知病院 小倉 英郎	健康保険鳴門病院 市岡 隆男	高松平和病院 太田 展生
演題数	18題	17題	13題	20題	12題
シンポジウム			アトピー性皮膚炎の治療を巡る諸問題		DSCG吸入療法の効果と限界 アトピー性皮膚炎を巡る諸問題
特別講演	小児アレルギー疾患 最近の話題	食物アレルギー 診断と治療	アトピー性皮膚炎 最近の話題	アレルギー疾患と環境因子	アトピー性皮膚炎の 成因と治療
演者	国立療養所福岡病院 院長 西間 三馨	昭和大学医学部 小児科 助教授 有田 昌彦	長崎大学医学部 皮膚科 教授 吉田 彦太郎	名古屋大学医療技術短期大学部 教授 鳥居 新平	横浜市立大学医学部 皮膚科 助教授 池澤 善郎
招待講演		成人期発症喘息について	中高年発症型喘息の病態	食物アレルギーにおける 原因アレルゲンの検索と 食品素材の低アレルゲン化	喘息と川崎病
演者		愛媛県立中央病院 内科 上田 暢男	岡山大学医学部 第2内科 講師 高橋 清	徳島大学医学部 栄養学科 教授 小川 正	NTT九州病院 院長 古庄 巻史

	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回
開催日	平成6年4月23-24日	平成7年4月22-23日	平成8年5月25-26日	平成9年5月17-18日	平成10年5月30-31日
開催県	愛媛	高知	徳島	香川	愛媛
会場	松山ワシントンホテル 愛媛県立文化会館	国際ホテル高知 高知電気ビル	ホテルクレメント徳島 郷土文化会館	京王プラザホテル高松	南海放送本町会館
会長	松山赤十字病院 小谷 信行	高知県立西南病院 森田 英雄	徳島健生病院 榎本 新也	香川医科大学 伊藤 進	福岡小児科医院 福岡 圭介
演題数	19題	22題	17題	14題	15題
シンポジウム				〈記念講演〉 香川医科大学小児科学 大西 鐘壽	〈記念講演〉 徳丸小児科 徳丸 実
特別講演	スギ花粉とヒョウヒダニのアレルゲン	マスト細胞とアレルギー	気管支喘息の病態と 新しい治療への展望	消化管とアレルギー 予防接種とアレルギー	低出生体重児の慢性肺疾患の 現状とその予防
演者	国立相模原病院 臨床研究部免疫研究 室長 安枝 浩	順天堂大学医学部 免疫学 羅 智靖	京都大学医学部 小児科学 助教授 真弓 光文	順天堂大学小児科学 山口 雄一郎 国立療養所東高知病院 小倉 英郎	大阪府立母子保健 総合医療センター 新生児科 藤村 正哲
招待講演	小児気管支喘息の診断と予防	喘息死と最近の話題	小児アレルギー最近の話題	薬物反応の体差とP450の遺伝多型	小児喘息のトータルケア
演者	大阪府立羽曳野病院 アレルギー小児科 部長 豊島 脇一郎	東京都荏原病院 部長 松井 猛彦	山口大学医学部 小児科 教授 古川 漸	千葉大学薬学部 薬物学 教授 千葉 寛	寺道小児科医院 寺道 由晃

	第 11 回	第 12 回	第 13 回	第 14 回	第 15 回
開催日	平成 11 年 5 月 22-23 日	平成 12 年 5 月 27-28 日	平成 13 年 6 月 26-27 日	平成 14 年 5 月 25-26 日	平成 15 年 5 月 31-6 月 1 日
開催県	高知	徳島	香川	愛媛	高知
会場	ホテルサンルート高知	ホテルグランドパレス徳島	ホテルオークラ丸亀	国際ホテル松山	ホテルサンルート高知
会長	高知医科大学 松本 健治	徳島市民病院 松岡 優	三豊総合病院 島内 泰宏	くす小児科 久寿 正人	国立高知病院 小倉 由紀子
演題数	16 題	16 題	13 題	16 題	15 題
シンポジウム	〈記念講演〉 高知県医師会常任理事 市川 博和	〈公開シンポジウム〉 徳島市民病院 松岡 優 国療東高知病院 小倉由紀子 健康保険鳴門病院 市岡隆男 徳島健生病院 榎本新也	〈公開シンポジウム〉 三豊総合病院 島内泰宏 国療香川小児病院 平場一美 高松平和病院 太田展生 にしかわクリニック 西川 清 坂出市立病院 細田禎三	〈公開シンポジウム〉 くす小児科 久寿正人 松山日赤病院 小谷信行 福岡小児科アレルギー科 福岡圭介 ポートランドVAメディカルセンター 楠目和代 県立今治病院 日根野 尚	〈公開シンポジウム〉 国立高知病院 小倉由紀子 高知医科大学 森澤 豊 国立高知病院 小倉英郎 おおた小児科 太田美登里
特別講演	気管支喘息治療の実際	アトピーの病因遺伝子の解明と臨床 - IL-12 レセプターβ 鎖遺伝子異常 を含めて -	アレルギー疾患 - ゲノムプロジェクトの現状と 問題点 -	思春期喘息と成人持ち越し例 について	小児気管支喘息治療における 最近のトピックス
演者	昭和大学医学部 小児科学 教授 飯倉 洋治	岐阜大学医学部 小児科 教授 近藤 直美	国立小児病院 齋藤 博久	半蔵門病院 副院長 灰田 美和子	藤田保健衛生大学 坂文種報徳會病院 小児科 教授 宇理須 厚雄
招待講演	アレルギー疾患の治療戦略 - 食物アレルギーを中心とした 展望 -	ダニアレルギー児のための 環境整備	テオフィリン徐放剤の吸収と 投与量の調整について	食物アレルギーの現状と進捗	白血球の自律神経支配 - アレルギー発症のメカニズムに ついて -
演者	千葉大学医学部 小児科学 教授 河野 陽一	国立療養所東高知病院 小倉 由紀子	昭和大学医学部 小児科学 講師 小田嶋 安平	東京大学大学院 農学生命科学研究所 上野川 修一	新潟大学大学院 免疫学・医動物学分野 教授 安保 徹

	第 16 回	第 17 回	第 18 回	第 19 回	第 20 回
開催日	平成 16 年 6 月 29-30 日	平成 17 年 6 月 4-5 日	平成 18 年 6 月 17-18 日	平成 19 年 5 月 26-27 日	平成 20 年 5 月 24-25 日
開催県	徳島	香川	愛媛	高知	徳島
会場	センチュリープラザホテル	サンポートホール高松	コムズ松山	高知市プラザかるぼーと	ホテルグランドパレス徳島
会長	すずえこどもクリニック 鈴江 純史	奎保小児科医院 平場 一美	愛媛生協病院 有田 孝司	けら小児科アレルギー科 森澤 豊	健生きたじまクリニック 田中 宏美
演題数	14 題	16 題	11 題+ミニシンポ 4 題	18 題	15 題
シンポジウム	(公開シンポジウム) すずえこどもクリニック 鈴江純史 えもとこどもクリニック 榎本新也 徳島市民病院 松岡 優 健康保険鳴門病院 市岡隆男 田口小児科クリニック 田口義行	(公開シンポジウム) 「こどもアレルギー - お母さんと先生方 のための最新情報と対策 -」 おおた小児科クリニック 太田展生 香川小児病院 木下あゆみ にしかわクリニック 西川 清 三豊総合病院 島内泰宏 屋島総合病院 矢野和夫	(公開シンポジウム) 「アトピー性皮膚炎にどう対応するか - 医療と保育・教育の現場から考える -」 くす小児科 久寿正人 愛媛大学 楠目和代 松山日赤病院 南 満芳 山越保育園 家久あゆみ 立花保育園 小久保早紀 福岡小児科アレルギー科 福岡圭介	(公開シンポジウム) 「食物アレルギーにどう対応するか - 医療と保育・教育の現場から考える -」 高知大学 篠原示和 けら小児科 森澤 豊 国立高知病院 小倉由紀子 たかしろ乳児保育園 宇都宮喜美 福岡小児科アレルギー科 福岡圭介 国立高知病院 小倉英郎	(公開シンポジウム) 「食物アレルギーにどう対応するか - 医療と保育・教育の現場から考える -」 健康保険鳴門病院 市岡隆男 えもとこどもクリニック 榎本新也 すぎのこ保育園 森本まゆみ 阿波市 宮根千秋 徳島市民病院 松岡 優
特別講演	小児喘息と気道過敏性について - アレルギー研究 30 年の軌跡 -	乳幼児喘息とテオフィリン療法	思春期喘息について	アレルギー疾患と行動療法	乳幼児喘息の診断と治療
演者	いがらし小児科アレルギークリニック 院長 五十嵐 隆夫	昭和大学医学部 小児科 客員教授 小田嶋 安平	国立病院機構福岡病院 小児科 小児科統括診療部長 小田嶋 博	国立成育医療センター アレルギー科 医長 大矢 幸弘	富山大学医学部 小児科 医長 足立 雄一
招待講演	アレルギーと腸内細菌及び生活 環境 - フィールド研究における 取組を中心に -	食物アレルギー 最近の知見	食物アレルギーを巡る最新情報	小児気管支喘息の適正治療 - それでもテオフィリンは 必要・有用である -	皮膚科医が診る小児の アトピー性皮膚炎の診断と治療
演者	千葉大学医学部 小児科学 教授 河野 陽一	国立病院機構福岡病院 小児科 医長 柴田 留美子	あいち小児保健医療総合センター アレルギー科 医長 伊藤 浩明	東京慈恵会医科大学 小児科学 講師 勝沼 俊雄	山王病院 皮膚科 部長 佐藤 佐由理

	第 21 回	第 22 回	第 23 回	第 24 回	第 25 回
開催日	平成 21 年 6 月 27-28 日	平成 22 年 6 月 5-6 日	平成 23 年 6 月 18-19 日	平成 24 年 5 月 26-27 日	平成 25 年 5 月 25-26 日
開催県	香川	愛媛	高知	徳島	香川
会場	オークラホテル丸亀	ひめぎんホール	高知城ホール	センチュリープラザホテル ふれあい健康館	ことひら温泉琴参閣 四国こどもととなの医療センター
会長	国立病院機構香川小児病院 木下 あゆみ	愛媛県立新居浜病院 楠目 和代	高知大学 大石 拓	山田こどもクリニック 山田 進一	香川大学 西庄 佐恵
演題数	13 題	17 題	19 題	15 題	18 題
シンポジウム	(公開シンポジウム) 「食物アレルギー児が楽しく生活を送れるために」 香川小児病院 木下あゆみ 杵保小児科医院 平場一美 こぶし中央保育園 長野邦子 宇多津小学校 愛染麻水 宇多津町立中央保育所 西尾節美 丸亀市 神余かよ	(公開シンポジウム) 「喘息を知って上手に治そう」 愛媛大学 楠目和代 高岡眼科小児科 高岡知彦 愛媛生協病院 有田孝司 くす小児科 久寿正人 福岡小児科アレルギー科 福岡圭介	(公開シンポジウム) 「食物アレルギー」 高知大学 大石 拓 けら小児科 森澤 豊 国立成育医療センター 野村伊知郎 国立高知病院 小倉由紀子	(公開シンポジウム) 「アレルギー疾患をよくなるための日常のコツ」 健生きたじまクリニック 田中宏美 田口小児科クリニック 田口義行 山田こどもクリニック 山田進一 NPO 法人アレルギー支援ネットワーク 中西里映子	(研究会シンポジウム) 「震災とアレルギー その後の活動状況」
特別講演	アレルギー疾患の発症は 何が決めるのか	患者さんに教えてもらったこと	私とアレルギー	シンポジウム 「震災とアレルギー疾患」	ランチョンセミナー 「乳幼児喘息の治療選択」
演者	国立成育医療センター研究所 免疫アレルギー研究部 松本 健治	愛媛県立新居浜病院 小児科 部長 楠目 和代	高知大学医学部 小児思春期医学 大石 拓	徳島大学環境防災研究センター 中野 晋 あいち小児保健医療総合センター 伊藤 浩明 各県からの報告	国立病院機構三重病院 臨床研究部 長尾 みづほ
招待講演	外来での除去食療法解除の試み	小児アレルギーの診察 最近の話題	新生児乳児の消化管アレルギー 診断治療と病態生理	食物アレルギーの新しい 診療ガイドライン 2012 を踏まえて	新生児・乳児消化管アレルギーと ALST 検査について
演者	いたやどクリニック 小児科 木村 彰宏	神奈川県立こども医療センター アレルギー科 部長 栗原 和幸	国立成育医療センター アレルギー科 野村 伊知郎	あいち小児保健医療総合センター 内科 部長 伊藤 浩明	静岡県立こども病院 免疫アレルギー科 科長 木村 光明

	第 26 回	第 27 回	第 28 回	第 29 回	第 30 回
開催日	平成 26 年 6 月 21-22 日	平成 27 年 6 月 27-28 日	平成 28 年 6 月 4-5 日	平成 29 年 6 月 24-25 日	平成 30 年 9 月 24 日
開催県	愛媛	高知	徳島	香川	愛媛
会場	松山全日空ホテル 松山市新医師会館	ホテル日航高知旭ロイヤル 高知市文化プラザかるぼーと	ホテルグランドパレス徳島 徳島市シビックセンター	高松国際ホテル 香川県立中央病院	テクスポート今治
会長	たかおか小児科 高岡 知彦	大西病院 小倉 英郎	徳島大学 杉本 真弓	高島小児科・アレルギー科医院 岡本 尚子	愛媛県立今治病院 村上 至孝
演題数	13 題	17 題	18 題＋ミニシンポ5題	19 題	18 題
シンポジウム	〈公開シンポジウム〉 「みんなで知ろう！小児アレルギー疾患」 「学校給食による死亡例を教訓に、園学校とのより良き連携を考える」	〈公開シンポジウム〉 「園・学校給食における食物アレルギーを考える」	〈公開シンポジウム〉 「アレルギーのプロが語る、子どものアレルギー克服のコツ」 ひなたクリニック 市岡隆男 健生きたじまクリニック 田中宏美 山田こどもクリニック 山田進一 とくしま食育推進研究会 野間智子 徳島大学病院 杉本真弓 くはらクリニック 久原 孝	〈公開シンポジウム〉 「学校・園におけるアナフィラキシー対応～レッツシミュレーション！～」 高島小児科 岡本尚子 杵保小児科 平場一美	【西日本豪雨のため、平成 30 年 7 月 7 日～ 8 日に予定されておりました会は 9 月 24 日に延期となりました】
特別講演	乳幼児の食物アレルギー： 気管支喘息の発症予防をめざして	小児気道アレルギーの 発症・進展・増悪の予防： アレルギーマーチの視点から	小児アレルギー疾患の臨床における多 職種連携(PAE の役割)	食物経口負荷試験の豆知識	小児気管支喘息診療 up to date
演者	同志社女子大学 生活科学部食物栄養学科 教授 伊藤 節子	千葉大学大学院医学研究院 小児病態学 教授 下条 直樹	大阪府立呼吸器・アレルギー 医療センター 小児科 主任部長 亀田 誠	国立病院機構相模原病院 小児科 医長 柳田 紀之	福岡市立こども病院 アレルギー・呼吸器科 科長 手塚 純一郎
招待講演	乳幼児喘息への早期介入： 寛解・治療を目指して	小児気管支喘息の治療戦略 ～上下気道からのアプローチ～	食物アレルギーの免疫療法： 現状と課題	小児アレルギー疾患は治せるか？	
演者	国立病院機構福山医療センター 診療部長 池田 正憲	獨協医科大学 小児科 准教授 吉原 重美	国立病院機構三重病院 院長 藤澤 隆夫	大阪府済生会中津病院 小児科、免疫・アレルギーセンター 大阪乳児院 院長 末廣 豊	

	第 31 回	第 32 回
開催日	令和 1 年 7 月 6～7 日	令和 3 年 8 月 1 日
開催県	高知	徳島
会場	高知医療センター	Web 開催
会長	大井田病院 矢野 哲也	徳島県立中央病院 七條 光市
演題数	17 題	11 題
シンポジウム	<p>〈公開シンポジウム〉</p> <p>「アレルギー疾患対策基本法で何が変わるか」 高知県健康政策部健康対策課 江崎治郎 アレルギーの子を持つ親の会かたつむり 岩川明子 国立病院機構高知病院 小倉由紀子 大井田病院 矢野 哲也</p>	<p>【新型コロナウイルス感染拡大のため、Web 開催となりました】</p>
特別講演	小児アレルギー性鼻炎治療における 舌下免疫療法の位置付け	アレルギー、アナフィラキシーの診断精度 の向上と、免疫療法のモニター精度を 向上させるアレルギー診断 DCP チップ の現状と今後の展望
演者	山口大学大学院医学系研究科医学 専攻 小児科学講座 教授 長谷川俊史	徳島大学先端酵素学研究所 生体防御病態代謝研究分野 特任教授 木戸 博
招待講演	イギリスの小児医療 ーアレルギー疾患を中心にー	
演者	ジャパングリーンメディカルセンター 院長 小谷伸行	

四国小児アレルギー研究会会則

平成元年7月 8日 設立制定

平成30年9月23日 一部改定

- 第1条 本会は四国小児アレルギー研究会と称する。
- 第2条 本会は四国の小児アレルギー及び周辺疾患に関する研究、臨床、治療の進歩普及を計り、会員相互の親睦と内外の関連機関との連絡を計ることを目的とする。
- 第3条 本会の会員は第2条の主旨に賛同し、登録する医師等で構成する。
- 第4条 本会の年会費は医師5,000円、医師以外の医療関係者3,000円、初期研修医および学生無料とする。
- 第5条 本会は前条の目的を達成するために、毎年一回ずつ四国四県（香川―愛媛―高知―徳島）を慣例として持ち回りで、総会及び研究会を開催する。
- 第6条 本会は次の役員を置く。
1)世話人 若干名 2)顧問 若干名
3)会計 1名(当該会長が兼任する) 4)会計監査 1名
5)事務局長 1名(当会代表)
- 第7条 総会及び研究会の開催は、世話人会の推薦により、該当県の適任と認められる会員が会長を委任され、会を主催する。
- 第8条 世話人会は顧問を若干名置き、その意見を聞くことができる。
- 第9条 役員任期は4年とする。但し再任を妨げない。
- 第10条 会則の変更は、総会出席の過半数の賛同を必要とする。
- 第11条 本会への参加は、本会の主旨に賛同し、会員の推薦を受けた医療関係者（医師、薬剤師、看護師、保健師、栄養士、保育士、教師、臨床心理士等）とする。
- 第12条 年一回会計報告をする。世話人会の承諾を得る。
- 第13条 本会の所在地は、香川県丸亀市飯山町川原972-1空保小児科医院。
事務局を空保小児科医院内に置き、事務局長を平場一美とする。

●世話人 (アイウエオ順)

有田 孝司 (愛媛生協病院)
大石 拓 (高知大学医学部小児思春期医学)
太田 展生 (おおた小児科アレルギー科クリニック)
岡本 尚子 (高畠小児科・アレルギー科)
小倉 英郎 (大西病院)
小倉 由紀子 (国立病院機構高知病院)
木下 あゆみ (国立病院機構四国こどもとおとなの医療センター)
久寿 正人 (くす小児科)
小泉 宗光 (小泉小児科)
七條 光市 (徳島県立中央病院)
島内 泰宏 (三豊総合病院)
杉本 真弓 (徳島大学病院)
高岡 知彦 (たかおか小児科)
田中 宏実 (健生きたじまクリニック)
竹廣 敏史 (竹広小児科医院)
西川 清 (にしかわクリニック)
西庄 佐恵 (香川大学医学部小児科学講座)
平場 一美 (杵保小児科医院)
細田 禎三 (ほそだこどもクリニック)
福岡 圭介 (福岡小児科アレルギー科)
森澤 豊 (けら小児科アレルギー科)
矢野 哲也 (大井田病院)
山田 紳一智 (山田こどもクリニック)
村上 至孝 (愛媛県立今治病院)

●顧問 (アイウエオ順)

江口真理子 (愛媛大学大学院医学研究科小児医学 教授)
香美 祥二 (徳島大学病院 病院長)
日下 隆 (香川大学医学部小児科学講座 教授)
藤枝 幹也 (高知大学医学部小児思春期医学 教授)

●会計監査

久寿 正人 (くす小児科)

四国小児アレルギー研究会

事務局 杵保小児科医院

住所: 〒762-0082 香川県丸亀市飯山町川原 972-1

電話: 0877-98-2010

事務局長 平場 一美
